

関わった人たちの声

Q.1

テクノロジーを導入するに至るまでの経緯、きっかけは何でしたか？

これまでは表現活動としては主に絵画に取り組んできたのですが、(利用者)本人が発する声や紙を破る音、物を投げ落とす音なども本人の表現ではないかと考えるようになりました。本人が発する音を探取し、それらを組み合わせて音楽を作ること考えるうちに、実に多様な音に囲まれて生活していること、人によって発する音が異なることに気づき、驚いています。



木村 基
四天王寺和らぎ苑
リハビリテーション室主任、
作業療法士

重症心身障害のある人たちをケアする施設「四天王寺和らぎ苑」の作業療法士。約20年間にわたり表現活動とリハビリテーションを実践し、身体・環境・活動などの面から利用者をサポートしている。

Q.3

テクノロジーを導入し、使い方を試行錯誤する段階では、どのようなことを意識していましたか？ 印象的なことは何でしたか？

Neutoneのソフトウェアをインストールしたパソコンの前に、障害のあるメンバーとそうでないメンバーが肩を寄せ合いながら、ああでもないこうでもないといろいろな音の入力を試していた姿に、ウェルビーイングを感じました。Neutoneは入力した音(例えばあなたの声)を別の音(ドラムやピアノ、鳥の声など)にリアルタイムで変換するツールです。音楽の知識がなくても、楽器を使うことなく面白い音が即座に出せるというNeutoneの特徴が活きたシーンとして強く印象に残りました。



徳井 直生
株式会社Neutone 代表取締役、
アーティスト、AI研究者

AIを使った音楽パフォーマンスや楽曲制作を手がけるかわらで、企業にもAI技術を提供する。音色を生成するAI「Neutone」を開発。

Q.2

一緒に取り組む人との関わり方において、特に意識したことはなんですか？

音(楽)をめぐる新しい技術について実践的に知ることができること、そして障害のある人たちとの交流という二つの点で、音楽大学としても可能性を感じてワークショップの実施を決めました。特に後者は多くの学生にとって、日常的ではない他者とのコミュニケーションの場を経験できるという期待がありました。学生には、上記二つの意味を20分程度で説明しました。前半の、Neutoneを用いたユニークな音づくりに衝撃を受ける様子、そして後半の、グループ制作の中で恐るおそる提案しながら手探りでコミュニケーションを試みようとする学生たちの姿が印象的でした。



久保田 テツ

福山大学 准教授(元大阪音楽大学 准教授)

音楽大学の教員として、メディアとコミュニケーションに関する教育研究や映像をめぐる場づくりに取り組む。個人での「Neutone」の体験を経て、大学でも学生や施設の人たちと音楽制作ワークショップを実施。

Q.4

今回使ったツールや試みをほかの場所でも日常的に活用してもらうために、何が必要だと思いますか？

音によるコミュニケーションを探究したポーリン・オリヴェロスは、「音の瞑想」として「実際に音を作ること」「積極的に音をイメージすること」「いまここにある音を聞くこと」「音を思い出すこと」を提唱しています。ここに、音色生成AI「Neutone」による「音を変えること」を加えてみると、新たな関係性や対話が生まれるのではないのでしょうか。音色の変換を通じて、音を聴き直したり、驚きや発見を共有するプロセスのなかで技術者と非技術者との境界はだんだんと曖昧になり、その時間と空間を共にする人々の間に新しい表現とコミュニケーションが生まれる可能性を感じます。



伊藤 慎一郎

京都産業大学
情報理工学部 准教授

大学で音響設計を学び、現在はインクルーシブデザインが研究領域。音色生成AI「Neutone」を使った音づくりのワークショップのなかで、録音や創作における技術サポートや共同制作を行なう。